

祇園祭と能

―能〈異国退治〉と船鉾との関係をめぐって―

宮本圭造

毎年この時期になると、祇園祭に関するニュースを目にする機会が多い。今年も、山鉾巡行の見せ場である「辻回し」を酒や料理の飲食とともに見物できる「プレミアム観覧席」の是非をめぐるニュースが取り上げられた。「祇園祭はショーではない」との八坂神社側の抗議を受けて、「プレミアム見物席」はその内容を改め、今年もソフトドリンクのみの提供とすることで折り合いがついたという。もっとも、歴史的に見れば、「棧敷席」という名のプレミアム観覧席で酒食とともに山鉾巡行を見物するのは、室町期以来の古き伝統でもあった。かつて、世阿弥がまだ少年であった頃に、足利義満と山鉾見物の棧敷席（四条東洞院に設けられた）で同席し、酒盃の御流れを頂戴したことがあった（『後愚昧記』永和四年（一二七八）六月七日条）のは、能の研究者の間では広く知られるところである。

ところで、その祇園祭の山鉾には、「菅刈山」と（菅刈）、「橋弁慶山」と（橋弁慶）、「木賊山」

と（木賊）、「黒主山」と（志賀）のように、能と素材・趣向の重なるものが多い。これらの山鉾が能を直接の素材としているのか、あるいは能と共通する素材を取り上げただけなのかは、必ずしも判然としないところであるが、いずれにせよ、山鉾の趣向と能の素材とがきわめて近い関係にあったのは確かであり、両者あいまって室町期の京都の人々における文芸受容のありさまを物語る貴重な事例と言えよう。そして、これから取り上げる「船鉾」と番外曲（異国退治）もまた、その一例ではないかと思われるのである。

〈異国退治〉は室町後期の観世座ワキ方として活躍した観世長俊の作。長俊は父の信光と同じく、スペクタクル重視の能を数多く作ったが、カラクリなどを駆使した、あまりにも大規模な作品が多かったために、現在まで現行曲として生き延びているのは（江野島）（大社）（正尊）（輪蔵）のわずかに四曲に過ぎない。〈異国退治〉もまたその他の例にもれず、現在

は廃曲となっている作品で、時代を遡っても室町・江戸期を通じて一切上演記録が見当たらない稀曲中の稀曲なのである。

本曲の素材は、『八幡愚童訓』などの八幡縁起に見える「神功皇后三韓征伐」の物語である。劇は、神功皇后に仕える臣下（ワキ）が、宣言を受けて筑前吹上の地にやってくる場面から始まる。かの地で一人の老翁（前シテ。実は志賀の明神）と出会った臣下は、「吹上の地に松を植えさせ、その松が一晩のうちに新芽を芽吹いたならば末代の嘉例となるであらう」と宣言の内容を伝え、老翁に松を植えるよう命じる。老翁が「畏て候」と答えた後の舞台上の演技がどのようなものであったかは、謡本（元禄二年林和泉掾刊番外謡本）にも具体的な記載がなく不明だが、「ありがたやかゝる時代にあひおひ松乃、みどり立枝は霞をうがつて、げにはびこれる此松乃、万代までもいき乃松」という謡に合わせて、松が見る見るうちに生い出る様を表現する、何らかのカラクリが用いられた可能性もある。続くクリ・サシ・クセでは、新羅に打ち勝つために干珠満珠の両珠を龍宮から借りてくるよう、神功皇后が志賀の明神に勅命を下した由が語られる。その勅に応じて、先ほどの老翁が「いそぎ帰りに彼玉をいただきて参るべし」と言い残し、志賀の海に姿を消すところで中入となる。後場ではまず、沖の方から龍神が龍女を従えて出現し、干珠満珠を神功皇后に捧げる。その瑞相に神々は喜び勇み、「すなはちもろ

こしハかどいでよし」と艦綱を解いて舟を出す、龍神もまた舟に飛び乗って神功皇后の御舟を守護するのであった。

以上が〈異国退治〉の概要であるが、このうち龍神が干珠満珠を捧げたという後場のエピソードは、番外曲〈劍珠〉などにも見えて人口に膾炙したものであり、そこでの龍神のハタラクが本曲の一つの見せ場であったと言えよう。もつとも、同様の趣向を持った作品にはすでに〈岩船〉や〈玉井〉などがあって、これだけでは〈異国退治〉はいささか新味に欠けた作品と言わざるを得ない。前場の松をめぐるやり取りも、前述のカラクリがなかったとすれば、やや盛り上がり不足の場面であり、謡本のテキストからだけでは、〈異国退治〉のオリジナリティがどこにあったのか、あまり判然としないのである。しかしながら、〈異国退治〉の本当の見せ場は、詞章にはつきりと描かれていない部分にこそあったのではなからうか。

例えば、〈異国退治〉の詞章から確実に登場していたと考えられるのは、神功皇后の家臣（ワキ）・志賀明神の化身である老翁（前シテ）・龍神（後シテ）・龍女（ツレ）のみであるが、後場で龍神が珠を持って登場する場面には、「その時神／＼よろこびたまひ、／＼、さもいさぎよきわたつみ乃、底なる玉をとらんとする」という文句があり、ここでは神功皇后をはじめとする神々がツレとして実際に舞台上に登場し、龍神から珠を受け取る演技があったと想

定される。そして、前場に「（玉）ひる玉（玉）つ玉の両珠なくては叶ふまじ、龍宮に参り給ひ、異国を退治したまへと、をの／＼（巻）そうし給へば」（傍線筆者）とあるのによれば、これらの神々は後場だけでなく、前場にも登場していたと考えるのが自然であろう。すなわち、〈異国退治〉は前述の老翁・龍神・龍女に加えて、「三韓征伐」に参加した住吉明神・高良明神・鹿島明神などの神々が神功皇后とともに登場する、多人数物の能だったと思われるのである。これらの諸役に割り当てられたセリフが特に見当たらないのは、子方の出演を前提としていたためなのであろう。

もう一つ注目されるのは、本曲のキリに「とも綱をときて舟を出せば」、あるいは「いかり（船）乃つなでをくり入／＼、舟のほを引御舟をしゆ（守）ごし、ほどなく異国にわたり給ふ」などのように、異国への出船の様子を示す「具体的な」記述が多く見られる点である。ここでは神々の乗る大きな船の作り物が実際に登場していた可能性が想定されるのではなからうか。

ところで、神功皇后の「三韓征伐」における「船」と聞いてまず想起されるのは、祇園祭の山鉦巡行に登場する「船鉦」であろう。船鉦は祇園祭が応仁の乱で一時中絶する以前から見られる、祇園祭を代表する鉦の一つで、龍神が神功皇后に干満宝珠を捧げる場面が作り物によって表現された。祇園山鉦を描く最古（十五世紀）の画像資料である『月次祭礼図』（横

本）』（東京国立博物館蔵）にも長刀鉦と並んでその姿が見え、また、江戸期の『祇園会細記』にも、神功皇后の御座船上で赤頭・龍戴姿の龍神が宝珠を捧げ持つ船鉦の挿絵とともに、次のような説明書が載っている。

神功皇后三韓退治し給ふ出船のをうつす。  
（中略）神功皇后三韓を征伐し給ふ時、豊前の国宇佐の郡にして、四十八艘の御船を作りたり。安曇の磯良神勅により来る。是を使として、竜宮の乾珠満珠を求め給ふて、大將軍にハ住吉大明神、副將軍にハ高良大明神、梶取にハ鹿島、扱異国にいたりて高良明神に仰せて、乾珠満珠の奇瑞あつて、三韓の王つゝに降参し、永く日本へ貢ものを奉らんと誓へり。

この船鉦が描く場面は、まさに能〈異国退治〉の世界と重なり合う。両者の関係性についてはなお決め手を欠くものの、船鉦が異国退治以前から見られる古い鉦であったこと、〈異国退治〉が大きな船の作り物を実際に用いていた可能性があること、をも踏まえるならば、能〈異国退治〉は祇園祭の船鉦を舞台上に再現することを主眼として作られた曲であったと見ることが出来るのではなからうか。さらに想像をたくましくするならば、巨大な船の作り物の下に船鉦と同様の車輪を設け、船に乗ったまま神々が幕入りした可能性も考えてみてよいかも知れない。

そこで気になるのが、永正十六年（一五一九）三月に京都東山の「祇園林辺」（祇

園八坂神社近くで行われた勸進能に関する記事である。この勸進能は『宣胤卿記』によれば「祇園回廊」の修造勸進のための興行で、大夫は観世であったという。その何日目かの興行に出かけた公家の鷲尾隆康は、当日演じられた能について次のような感想を述べている（『二水記』永正十六年三月十九日条）。

脇能河船<sup>三</sup>、超過大能也、驚目了

この「河船」なる能がいかなる作品であったかは不明で、観世長俊作の能〈河水〉（廢曲）のことではないかとする説もあるが、〈河水〉はそもそも脇能ではないし、何より同曲には船が登場しない。とすると、ここで取り上げた〈異国退治〉あたりが候補曲として挙がったこよう。〈異国退治〉の船は海を渡る船であって、「河船」という表現は必ずしもそぐわないものの、曲名の下に「云云」とあるように、鷲尾は曲名を正確に記憶していたわけではないらしい。さらにこの時の勸進能が祇園社関連の催しであったことを踏まえるならば、「超過大能」「驚目」と評されたこの日の脇能が、祇園祭の船鉾で御馴染みの巨大な船の作り物を舞台上に出現させて、観客の目をあっと驚かせた観世長俊作の能〈異国退治〉であったと考えるのは、必ずしも突拍子もない思い付きではないように思うのである。

（法政大学能楽研究所教授）